幼稚園の增設を望む

京都　藤田東洋（投）

一、

吾人は、幼稚園事業に關し彼是言ふべき資格無き門外漢なり。然れども其事業に就きては多大の趣味を有する者なり。一體幼稚園事業なるものが未だ社會全般に其內容の明確に徹底せざる點よりして、種々なる誤解を招き、批難を起す事尠少ならずとす。從つて其價値の如何なるものなるかを認められざるなり。之れ斯道の爲め最も遺憾とする所なり。

二、

幼稚園を參觀する者、一は保育の周到懇切なるを感謝するあり。或は其設備の足らざる事及恩物使用法の沒趣味、幼兒の取扱の事どもを以て幼稚園敎育の効果を疑ふ者もあり。然れども是等社會の人、參觀者と雖其多數は幼稚園其物を彼是言ふに非ずして、其保育方法の拙なるよりしてこれ等の事に事を寄せ利害關係を論ずるならんか。將又保姆の人格如何を言ふにあるか。然り方法としては、幾らも改良する點なきにしも非ずと雖、變化の本體を一種の如く考へ、或は保姆の眞想を知らず所謂皮想の感を以て幼稚園全體を評價するは、其當を得ざる盲評たるに過ぎざるなり。

三、

抑も幼稚園の事業は、家庭に屬し、學校敎育の範圍にあらず、家庭敎育の及ばざる所を補ふべき補助機關に過ぎざるなり。

然るに一般社會を見るに、家庭に於て幾分母の敎育の出來得る中等以上の幼兒の多くは幼稚園に

入れ、保育を受けしむるの傾向なり。家庭の空しからざる下層社會の幼兒が入園せざる狀態なり。此の如く生活上より、見ればさまで入園せしむる必要如何と思ふ者、却て保育を受けしめ、家庭に於て其日の勞働生活難に追はれ夫婦共稼ぎ晝夜營々とせるを以て、幼兒の保育は到底成し能はず爲めに、放任主義になし置くが故に、如何なる惡癖を感染するも之を監視し、保護する事能はず。あたら良萌芽も惡少年と交はり、不知不識の間に惡感化を受け、終生再び拭ふ能はざるが如き狀態に至る者少なからず。注意すべきは幼兒に於ける境遇、其交友なり。大都市に於ける裏長屋住、九尺二間の廊路住ひの幼兒は、遊ぶに所なく、物なく、況んや自然物に接觸する機會の少き家庭の多く立ち列ぶ町に至らば、幼兒の悲境實に同情に堪へざるあり。此の如き境遇にある勞働者、貧困者其他の幼兒を多く收容し、慈善的に市町費を以て適當に保育を施すは目下の急務にして且つ將來益激甚なる生存競爭の來るべきに於ては更に其必要を明はざるを得ざるなり。是等下層社會の幼兒を保育するは、間接には家庭の生產力を高め、直接には幼兒の心身の發育に多大の効あり、大都市の事業とし、機關として、此事業の增設を望むや切なり。彼の神戸に於ける戰後紀念保育會及大阪の愛染保育所の如き卽之れなり。

四、

近來惡少年、不良少年は各都下共に漸次其數を加へ、出沒、犯罪の巧妙なる事屢々聽く所なり。之れが爲めには感化院等の設けありて、府縣費數萬金を投じて之が感化に努力せらるゝも、其結果は、感化の目的を達せざるのみか、益墮落せしめ、少年泥棒の巢窟となりて、善美なる活模範を與え或は善良なる感化の稍不可能なるは事實なり、此の如き現狀にては完全に根本的に其精神を改造する事能はざるなり。

之れ不良少年の原因は、先天的に其一因ありと

雖、就中後天的たる境遇交友を始めとし其幼兒敎育の周到ならざりし點にあり。他の惡少年と交はり、不知不識の間に惡感化を受けたる者あり。此の如きに、莫大の費を徒浪し其結果の不良を見るよりは是等は適度の範圍に止め、進んで如上の保育所を各所に增設して、フレーベル主義に從ひ、下層社會の幼兒に善良なる保育を受けしむる事に努むるは、現下社會の要求にして、將又、大都市の當然設くべき事業の一たることを信ず。吾人は之れが大都市各地に先帝紀念事業として增設せられんことを絕叫し希望する次第なり。

○坊や創作

若き父

坊やは今月の末で滿三年と三ヶ月になる。例によつて早くから眼を醒まして、お父さんにお話をして頂戴とせがむ。今朝はお父さんが聽いて上げますから、坊ちやんがお話をして頂戴と賴んだら、熱誠をこめて何かしきりに獨り言を云つて居る間に、獨り手に次のやうなお話が發展して來た――

『小さい蟻がピョーンとお馬に乘りました。お馬はパカ〳〵〳〵〳〵センン〳〵〳〵〳〵パカ〳〵〳〵〳〵と走りました。蟻は小さいんですから、又ピョーンとお馬から墜ちました。蟻の小さい小さい眼玉は夢を見ました。向うーのお山に兎さんと龜さんと居りました。狸は龜さんに打たれて痛い〳〵と泣いたら、兎さんのお母さんが「どうしたの」と聞きました――』

此の次に坊やの云つた事は、全然右の話とは違つた系統のものであつた。話から夢になり、夢の中の話から又更に話が發展して、之れから之れへと思想が疾走して行くので、記者の生活に慣れない且つ不用意の父さんは、坊やが獨り言を終つた時までの全體の筋を捕へて置く事は出來なかつた。

同一系統に屬する材料を、記憶の働きで締め付けて前後の纏まりを保たせながら、一つのお話を自分で作り出して行くまでには、今後どの位の時を要するであらうかなど考へて、父さんはのん氣に坊やのお話を聞いて居る。

ゆるい春の疲れを味はいながら、父さんは坊をかゝへて、まだ伸び〳〵として床中に身を橫へて居る。今朝は雨降りの日曜である。雨のせいか、一昨日も昨日も來て歌つてくれた鶯は未だ來ない。もう春雨らしくしと〳〵と降る細い雨は、油のやうに軟かい土に滲み通つて居るらしい。

――二月二十三日朝――

去月神田區に於ける大火には本會々員中類燒近火の災に罹かれし方も尠からず。茲に誌上を以て御見舞申上げます。

フレーベル會